

獣医師の就業環境の未来を考える

—すべての獣医師が働きやすい職場づくりに向けた取組（Ⅱ）—

男女ともに獣医師が働きやすい環境づくりのために

～女性獣医師特定理事そして女性獣医師委員会の設置～

白岩利恵子[†] ((一社)岩手県獣医師会・
第28期女性獣医師特定理事)

田高 恵 ((一社)岩手県獣医師会・
第29・30期女性獣医師特定理事)



白岩利恵子



田高 恵

初めての女性獣医師特定理事の設置

((一社)岩手県獣医師会は現在会員556名、うち女性120名で、会員数は年々減少しているものの、女性の占める割合は全国と同様で年々増えてきている状況である。

さらに役員のうち女性の占める割合は、現在の第30期においては20名中4名で20%を占め、高い割合となっている。

また、岩手県獣医師会食鳥検査センターでは、厚生省(現在の厚生労働省)から食鳥指定検査機関として指定され、平成4年から食鳥検査を行っているが、現在検査員55名のうち女性獣医師は10名勤務している。平成4年の食鳥検査スタート時には女性獣医師が一人もいなかったことを考えると、飛躍的な増加である。

さて、私(白岩)は昭和53年、岩手県庁で初めての女性獣医師として採用されたが、その当時は典型的な男性中心の職場であった。そんな時代を経て女性獣医師も徐々に増え、今では公衆衛生分野においては約50%が女性獣医師であり、子育てをしながらあるいは介護の親を抱えながら、配偶者とともに仕事を行っている状況である。

県の女性獣医師が1名だった時から退職までには環境

の整備も進み、働きやすい職場となったが、いつの時代も後輩の女性獣医師がずっと仕事が続けられるような体制を構築することや、環境の整備について考えることを忘れないつもりで仕事に臨んだ。これは、後に続く女性獣医師を成長させたいということであった。そして女性獣医師が生き生きと働くことができる職場になれば、必然的に男性も働きやすい職場、ひいては組織のレベルアップにつながると考えていた。

国においては平成26年、女性の活躍推進が内閣の成長戦略の中核に位置付けられ、「女性の活躍推進」に向けたさまざまな施策が進められた。

県獣医師会においても、女性会員を中心とした「女性会員セミナー」を平成26年度から開催し、女性獣医師の活躍支援のため各職場における獣医師全体の理解の醸成をさらに深めてきた。この当時は部会や委員会もなく、当職(白岩)と本会の事務局長以下数名で企画・運営を行ってきた。

このような取組をしていく中で、会長以下理事の中から女性獣医師の理事が必要であるとの声が高まり、第28期(平成29年度～30年度)の役員に女性獣医師特定理事(特定理事)が設けられ、当職(白岩)が理事として承認された。

女性活躍のために

女性獣医師特定理事となって初めて取り組んだことは、本県独自の課題等の抽出を目的とした就業環境等に関する現況調査アンケートである。このアンケートは日本獣医師会で行った内容を参考としたものである。

アンケート結果は本県獣医師の実情をまさに反映したもので、獣医師が抱えている不安は男女ともに、①冬の寒さが厳しい(54%)、②短時間勤務ができない(51%)、

[†] 連絡責任者：白岩利恵子 ((一社)岩手県獣医師会)

③休暇が取れない（50%）、担当する地域が広い（46%）が上位を占めていた。

また、女性の就業支援で不十分なものとして、①代替職員の確保（67%）、②子育てと仕事の両立モデルケースの整備（54%）、③休業からスムーズに復帰できる研修などがあげられた。

さらに自由記載では、小動物の開業に勤務していた女性獣医師が出産の際の産休・育休はおろか、雇用保険さえなく、やむなく離職したケースや産休・育休の制度自体は整っているが、代替獣医師を確保できないので妊娠・出産をためらう事例もあり、本県の獣医師不足そして獣医師の女性獣医師への理解不足を痛感した。

女性部会や女性委員会を早急に設置し、さまざまな課題やその対応策について協議し、仕事を続けやすい環境づくりを進めていくべきであるとの意見も多数寄せられ、理事会で設置について提案した。

女性獣医師会理事の2年間は毎年度女性獣医師を中心としたセミナーを開催した。平成27年度に学術協定を結んだ岩手県医師会、平成28年度に学術協定を結んだ岩手県歯科医師会のそれぞれの理事からも女性の働きやすい環境づくりについての先行・優良な取組を紹介していただいた。基調講演の講師は、29年度は日本獣医師会女性獣医師支援対策検討委員会副委員長である白戸綾子氏、30年度は同委員の福原美千加氏に務めていただいた。

以上のような取組が評価されたことと、アンケート調査で女性獣医師委員会あるいは部会の早急な設置を望む声が多かったこと、そして当職が理事会において、理事一人ではセミナー等の開催準備ができないことや女性獣医師の意見が十分吸い上げることができないということから本会会員の力も得られる委員会とするよう要望してきた結果、平成31年度（令和元年度）から女性獣医師委員会の設置が承認された。

また、第29期（令和元年度～2年度）から、新たな女性獣医師会理事として産業動物勤務部会から田高が選出され、新たな課題に取り組むこととなった。

第29期から設けられた女性獣医師委員会

第28期（平成29年度）に初めて女性獣医師会理事が設けられたのち第2期（令和元年度）からは女性獣医師委員会が設置され、各職域部会からの計4名の委員と特定理事である女性獣医師会理事の当職（田高）の5名での構成により活動を行っている。現在は第30期となり2期目の任期を遂行中ではあるが、令和2年1月からの新型コロナウイルス感染症のパンデミックの行動制限により2期の任期中のほとんどで思うように活動できていないというのが正直なところである。

女性獣医師委員会の活動

しかしながら新型コロナウイルス感染状況の落ち着いた頃合いをみながら、令和2年9月（1回目）と令和4年7月（2回目）の2回、女性獣医師委員会主催の研修会を行うことができた（写真）。

1回目は「男女がともに獣医師として活躍を続けるための懇談会」として、各職域から幅広い年代の女性獣医師会員と、それぞれの職域から管理職級の男性獣医師の20名の参加により開催した。初めに産業動物臨床勤務部会と畜産・家畜衛生部会のそれぞれ1名の女性獣医師がパネラーとして、職場や今の生活について事例紹介をし、その後ディスカッションを行った。懇談会の内容をまとめてみると「男女関係なく、仕事も家庭（プライベート）も満足感が得られる社会」になっていくためには、ワーク・ライフ・バランスは個々によってとらえ方が異なるため、仕事の量イコール仕事の質ではないし、要求されている仕事の量と提供できる仕事の量のバランスが取れていることが重要ではないか。そのためには各種制度への理解を醸成し利用できる職場づくり（人員の確保とコミュニケーションが良好な職場づくり、仕事の共有）が重要だということに集約された。

2回目は宮本ともみ岩手大学教授（前岩手大学副学長（男女共同参画））を講師としてお迎えし、「改めて男女共同参画推進について考えてみましょう～北東北未来の船頭を目指した岩手大学の歩みを振り返って～」という演題でご講演をいただいた。各職域から女性獣医師会員のほか、産業動物臨床開業所属の男性獣医師会員数名を含む18名での研修会開催となった。ご講演の内容としては、「男女共同参画推進」が唱えられた背景について、ワーク・ライフ・バランス憲章の策定（2007年）や働き方改革の登場等があり、さまざまな面から進められてきたことの説明があった。宮本先生は、日本は、ジェンダーへの意識が強く、Positive Action (<https://www.mhlw.go.jp/positive-action.sengen/index.html>)への抵抗も強い。国の指示や学長のトップダウンが大きな役目を果たす。社会の問題だと意識させる、理解を求めていくことが大事であると力説された。

岩手大学の取組についての紹介では、女性研究者の採用比率20%、在職比率を16%、管理職比率10%まで上げることを目標として取り組んでいる。そのために上位職への女性研究者登用のためのシステムを確立させる。研究環境の整備で、ライフイベントに対応できるよう支援を切れ目なく整備した。いろんな場面で“相談できること”が大事であり、今後は、男女分け隔てなくみんなで底上げしていくことが重要であると講演の結びに話された。

男性獣医師の参加者からは、「若い世代では男女関係なく、家庭内ではパートナーに対してワーク・ライフ・



令和4年度女性獣医師委員会主催研修会

バランスが取れた生活や、本人の希望する職種での自己実現を望んでいる」旨の発言があった。

2回の研修会を通じて、女性獣医師はもとよりそのパートナーは、お互いに結婚・出産・育児などのライフイベントを通して長く働きたい、働き続けて欲しいと考えていることが感じられたことから、参加者一同、ワーク・ライフ・バランスを考えた働き方が、これからは望まれる働き方であることがわかった。

また、雇用する側としては、男女関係なく勤務する獣医師同志が十分なコミュニケーションを取れる職場づくりが重要だということがわかった。

さらに、宮本先生のご講演からは、職場の制度や雰囲気づくりは自然に醸成されるものではなく、初めは組織のトップや上位職の強いリーダーシップも重要であるということが感じ取られた。

女性獣医師委員会の今後

いずれの項目も言ってしまうえば「当たり前」のことではあるが、なかなか浸透しきれていないのが現実ではないかを感じている。また、女性獣医師が少なかった時代を経験しているわれわれ世代は「女性獣医師として、自分のためにも後輩たちのためにも頑張らなければ」と心のどこかで思いながら仕事と家庭生活の両立をしてきたように思う。しかし、おおよそ40代以下の世代は、男女ともにライフイベントにかかわらず無理なく働き続

けることが当たり前と考えており、また少子高齢化による世情を勘案しても、今よりもさらに制度や職場環境が整えられそれを利用する社会概念が醸成されていかなければならないと感じている。

また、女性獣医師の復職支援については、岩手県獣医師会のHPに人材情報窓口のサイトを常設しているほか、日本獣医師会の女性獣医師応援ポータルサイト(<https://www.nichiju-shien.com/>)へのアクセスを可能にしている。人材が限られている中、離職している獣医師の復職はどの職域でも待ち望んでいることであり、今後女性獣医師委員会でも積極的に取り組んでいきたい課題である。

女性獣医師委員会として取り組んでいかなければならない課題や具現化していかなければならないことはまだ多く残されている。しかし、2期の任期中に感じたことは、若い世代には性別を気にせず「いかに、自分らしく生きていくか」、「いかにパートナーと共に自分たちらしく生きていくか」という概念を潜在的に持っており、その概念こそが女性獣医師の活躍を定着させ飛躍させていくのだと新たに思わせてくれた。

いつかは女性獣医師という名称自体が使われなくなるであろうが、女性だけでない委員の構成や活動内容のアップデートをしながら、その時まであともう少し女性獣医師委員会の活動を続けることが必要ではないかと考えている。